

呑川水系のホタル・歴史的再生(その2)

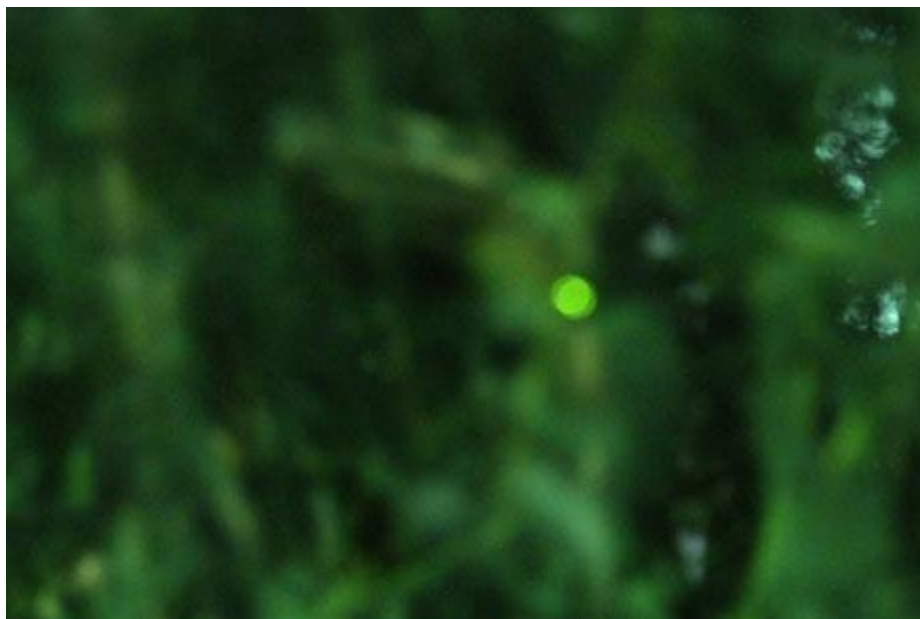
「洗足池」では、「セミの羽化・観察会」が8月の初めから、思わぬ多くの団体で行われています。「おおたく環境探検隊」でも行っていますが、お祝い事と重なったりして私はなかなか参加出来ないでいます。今年は、「セミの羽化」を見ると同時に、「ホタル」を楽しんだ方も少なくないと思います。私のホタルの撮影も少し進んだので、前回の「呑川レポート」の続きです。「呑川水系」のホタルは、「洗足流れ」が先行しましたが、「洗足池」でも「大森6中」の生徒たちが「自生」の試みを始めました。



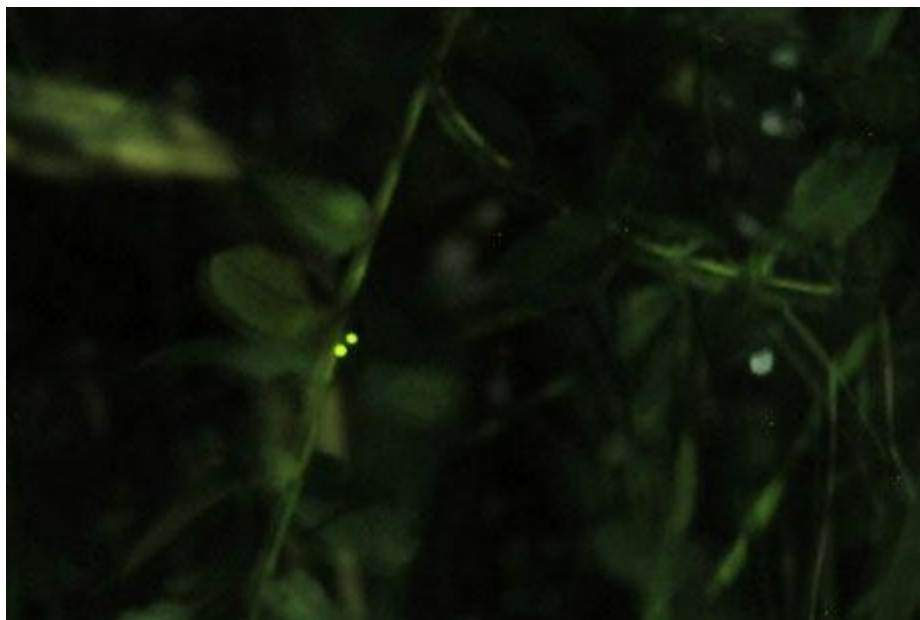
生徒たち自身が手を掛けた「ホタル池」に、昨年来から自分たちで育て上げた「ヘイケボタル」の「幼虫」を、この6月に放流しました。私が、観察を始めたのは7月半ばからでした。



やっと見つけたのは、ちいさな小さな明かりの点滅・・・それは「チカチカチカ」と、せわしく明滅する「ヘイケボタル」の可憐とも言える可愛らしさでした。



余程近づかなければ、小さな光の点としか写らず、やむなくピントを外して、大きな光の点にして、光芒を捕らえてみました。この方が光が大きく広がり、判りやすいかもしれませんが、写真の表現手法としては、幻想的になり許されても、なにかもの足りません。



すこし長時間(60sec)の露出をしてみます。

すると、2つの光の点になりました。

ホタルは飛ばないにせよ、動きますから、光の明滅も移動し、2カ所の光の点になりました。

しかし、移動すればピントは外れ、ボケ写真になってしまうのが残念です。

「ゲンジボタル」のように、光りながら飛ぶと、流れる光の尾となってきれいなのですが、「ヘイケボタル」はとても難しいのを感じます。

でも、「大森6中」の生徒たちが育てた「幼虫」が「さなぎ」になり、「成虫」になって光っている姿を、明確に捕らえてあげなければ、撮影が難しいからと言って、逃げていれば、彼らの労苦に報いてあげることが出来ません。



そこでやむなく、携帯の明かりで照らしてみました。
「成虫」になったホタルが、ちゃんと葉っぱの上にはいました。
しかし、これでは幻想的でも何でもありません。
ホタルの美しさを感じ取ることは出来ません。
しかも、携帯の明かりに驚いたのか、ホタルは光らなくなってしまいました。
これはマナー違反、ルール違反です。
他に来ている観察者たちにも迷惑を掛けてしまいました。
ここで私も考え込んでしまいました。
やはり、じっくり時間を掛けて、失敗を繰り返しながらも通い続け、
正攻法で撮影しなければいけないのを強く感じたのです。



これは、やはり 60 秒程度の露出で、ホタルの成虫を捕らえたものです。
この時はホタルは光ってくれませんでした。前の写真のようにクッキリではなくても、
ホタルがこんなふうに着ているという様子がよく判りますし、幻想的でもあります。



そして、ようやく捕らえたのが、ホタルのお尻が光った様子です。
しかし、60秒の間にホタルは動き、ピントはズレてボケ写真になってしまいました。
そもそも、暗くて正確なピント合わせが出来ないことが多く、このピント問題は、何かお手上げのようなのを感じてしまいます。



「ハイケボタル」の「メス」は、地面近くに居て、「オス」を待つといひます。
そこで、「メス」と思われる個体を探し回りました。
すると、腰を低くして地面近くの目線で見ると、葉っぱの下で照らすような光が見つかりました。
ホタル本体は見えませんでした。これで「メス」を見つけることが出来て、とてもうれしくなりました。
葉の裏側に居ることが多いのでしょうか・・・立った位置で、上から探せばかりでは、その光は見つかりにくいようです。



さて、何回も挑戦している内に、やっとチャンスが巡ってきました。
ピント合わせをした直後、ホタルはこちらを向いて光ってくれたのです。
赤い顔面の中央に、太い黒いスジ・・・「ヘイケボタル」の特徴をハッキリ捕らえることが出来ました。
しかもお尻を光らせて、その光で、片側の「足」が3本ともキチンと見えています。
長く伸びた「触覚」もなんとか確認できました。



さらに少し待つと、このホタルは横向きの姿を見せてくれ、身体のお尻というか、お腹の下の部分が光っているのがよく判ります。ホタルは、この部分が光るのです。
おそらくこの個体は、後ろの「2つの節」が光っているように見えますので、「オス」と思われます。
いろんな向きで撮影できると、その個体の多くの情報が得られます。



さて、この個体は飛びはしませんでした、良く動き、こんな光の帯を残してくれました。
良く光る個体は、良く動くような気がします。



そして、ついにスーッと光りながら飛んだのです。
ゲンジボタルとは違って太い光の線にはなりませんでしたが、なんとも可憐で、その美しさはため息が出るようでした。写真でそれをうまく表現出来ないのが残念です。
ここで、今夏のホタルの撮影は終わることになりました。
若い時だったら、シーズンの全てに精魂を傾けて、ホタルに集中したと思います。
年とった今は、今夏で明らかにしたいいくつかのテーマが気になり、その観察にも力を注ぎたいと思っています。
決して、こういう分散した方法が良いとは思わないのですが、若い時は若いなり、年老いた時は、その年なりのやり方があってもいいのではないかと考えています。
さて、「洗足池」の「ホタル池」を中心とする環境は、こんなイメージです。



水銀灯がギラギラ輝き、かなりの明るさです。

ここでホタルに「さあ、光りなさい」というのは無理があると思います。

公園内の「犯罪防止」という視点から、消す訳にはいかないにせよ、もう少し工夫があっても良いと思います。

そうでないと、ホタルの幼虫を放流した「大森6中」の生徒たちが可哀想です。

生徒たちは苦勞があっても、「ホタル」の「自生」の取り組みは楽しいと思います。

すぐには「自生」にたどり着かなくても、数年すれば、成虫にまで成長したホタルは「産卵」をして増え、やがて、幼虫の「放流」をしなくても良くなる時がやってくると思います。

その時には、その時の課題がまた出てくると思います。

卵から幼虫、さなぎ、成虫となる全課程に必要な環境や、エサを供給するために、日常的に要求されることが沢山あるでしょう。

そして生きものを育てる楽しさや、環境保護の面白さに夢中になるだけでなく、その「意義」や「歴史的視点」にまで関心を深めてくれればと思っています。

ここ「洗足池」は、むかし「大池」と呼ばれた「農業用水」の「ため池」でした。

それは、この洗足池のそばの「小池」とペアをなしていました。

ですからこの「大池」(洗足池)の水を利用して、周りは「田んぼ」が広がっていたのです。

つまり、「ヘイケボタル」の生息にぴったりの環境があったのです。

私は、洗足池の原風景の話聞いた時、現代の時点で、それをそのままの姿で確認することは出来ないけれど、その「片鱗」はないかと、自分で確かめたくくなりました。

たとえば昔の「ホタル」の様子まで見ることは出来なくても、「大池」と呼ばれていたその証しは、どこかに残っているのではないかと検証したいのです。

そこで、「洗足池」周辺を少していねいに、じっくり歩いて見ました。



すると、「大池サービス」という会社が駐車場の募集をしている看板に出会いました。

「洗足池」が「大池」と呼ばれていた片鱗は、ちゃんと残っていたのです。

そして、この場所に居たお年寄りからも、「ホタルが沢山いた」との話を聞くことが出来ました。

「洗足池」に「田んぼ」を作り、「ホタル池」を作り、ホタルの「自生」を目指す活動は、単にロマンを追い求めるだけではありません。過去の歴史や、人々の暮らしに、まったく無関係に「ホタル自生」の活動があるのではなく、「洗足池」周辺の歴史的「原風景」を復活させ、過去に実際あったすぐれた環境を再生する「歴史的再生」に特別の意義があるのだと思います。

もう「中学生」になった子どもたちには、そんな視点も頭に入れて、「誇り」を持って活動を進めて欲しいと思います。

さて、「呑川水系」の「洗足流れ」や「洗足池」にホタルが舞い始めると、こんどは、「呑川」の「支流」でなく、「本流」自体に「ホタル」が見られたかどうかを検証したくなります。

私が「石川町」に移ってきたのは、昭和 47 年(1972 年)なので、「呑川」は、もう 3 面コンクリート張りになっていて、ホタルが舞う環境があったかどうかは知りません。

でもこの地域のマンションに移ってきた時、そばに農地があり、そこの高瀬さんという方にお聞きした時は、この付近はホタルがいっぱい居て、「ヘイケボタル」も「ゲンジボタル」もいっぱい居たと言います。

「いつ頃までいたのですか？」と、おうかがいしたら、「つい最近まで・・・」と答えてくれました。

「つい最近」とは、「戦後しばらくの間、少なくとも昭和 20 年代は・・・」という意味のようでした。

あの時に農家の方と交わした言葉を思い出し、今の「呑川」で「ホタル」を直接見ることは出来なくても、なにか手がかりになることを確認したくなりました。

でも、上流の呑川を歩いても、その手がかりは見つかりません。

そこで、「ホタルの舞う環境」が、そのころ「呑川」に実際にあったかどうか・・・を検証して見ることにしました。



これは、占領下の日本で、米軍が日本を統治するために撮影した「航空写真」です。
「呑川」「中原街道」などの文字は、私が記入しました。

(当時の言葉では、「航空写真」でなく、「空中写真」と言われていました)

ここは、敗戦後まもない「昭和 22 年」の、「石川町 2 丁目」付近です。

「中原街道」に近いこの「呑川」は、くねくねと蛇行して流れ、川沿いに田畑が広がっています。
まさに「田舎」の風景が広がり、自然護岸だからこそ、川は蛇行して流れています。

こうして「ヘイケボタル」の舞う環境が、実際に広がっていたことが、確認できました。

そして「止水域」を好むヘイケボタルの環境、「田んぼ」などが広がっていただけでなく、「呑川」は「川」ですから、水の流れている所を好む「ゲンジボタル」もいたことが想像できるのです。

「呑川」は「自然河川」ではありませんでしたが、「六郷用水」と同じように「用水」として、つまり「農業用水」として、人々の暮らしに関わってきました。じっさい、この写真の「昭和 22 年」当時は、石川町からさかのぼり、源流の世田谷区桜新町に至るまで、ずっと呑川周辺は「農地」が広がっていたことが確認できました。

また、この写真では呑川の右岸(写真では左側)の方が、左岸よりも田畑が広がっています。

これも、誰から聞いたのかももう忘れたのですが、「呑川左岸は大岡山の台地がせまり、急斜面なので、呑川の水は引きにくかった、右岸は土地が低かったので、積極的に呑川の水を利用できた」と、説明を受けたことがあります。実際に「昭和 22 年」当時の写真を見ると、左岸・右岸にハッキリ差があり、当時の農業用水の利用のされ方が確認できました。

さて時が経ち、同じこの地域の「昭和 38 年」当時の「空中写真」を見てみましょう。

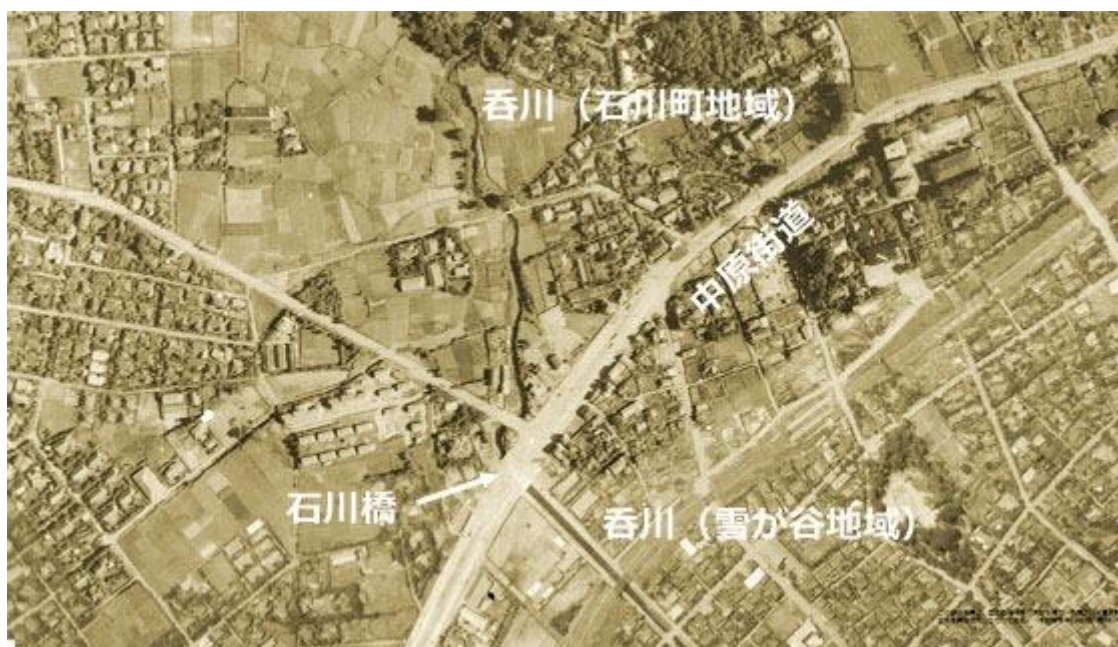


「昭和 22 年」には、「自然護岸」で細い筋のように見えていた「呑川」は、
「昭和 38 年」には、グンと川幅が広がり、すっかり「コンクリート護岸」になっています。
「昭和 22 年」では、どこに「呑川」の「流れ」があるのかという位の「小川」だったのに、
「昭和 38 年」では、すっかり押しも押されぬ「河川」になりました。
くねくねした「蛇行」は緩やかなカーブに変えられています。
なんとも驚くべき大変化です。
これでは、ホテルはもう棲むことが出来ません。

「昭和 22 年」から「昭和 38 年」へ、大きな大きな変化が起きたのです。
「昭和 39 年」の「東京オリンピック」を迎え、日本中、とりわけ「東京」は大変化を遂げた時期でした。
この時に、「ホテルの舞う呑川」は、消え去ってしまったのです。

農地だった所には住宅が建てられ、「石川台中学」「東玉川小学校」などの学校もこの時期に出来ています。
呑川を挟んで「石川台中学」の対岸に、「農地」がわずか残っているのが見えますが、この後すぐに「東急ドエル・アルス石川台」マンションが建てられ、この農地も消えてしまいました。

さて、現在の「石川町」に隣接する「雪が谷地域(東雪谷・南雪谷)」の「呑川」はどうだったでしょうか……



これは「昭和 22 年」の石川町から雪が谷にかけての「呑川」です。
「中原街道」を挟んで、「石川町」と「雪が谷」とに分かれます。
「昭和 22 年」当時の呑川は、「石川町地域」は自然護岸のままですが、
「石川橋」を超えて「雪が谷」に入ると、「蛇行」は「直線化」され、「コンクリート護岸」
になっているのがハッキリ見えています。

「雪が谷」地域が「コンクリート護岸」になったのは、戦前でした。
その背景には何があったでしょう・・・
それには「洪水対策」とともに、「大正末期」から始まった「耕地整理」が大きく
関係してきます。
この地域で「ホタル」が見られたのは、いつごろ迄だったでしょう・・・？

「ホタル」を追っていくと、いろんな事が見えてきます。
「呑川水系」のホタル・・・その「歴史的再生」の日がいつかやってくるのを楽しみにしようではありませんか……

-----photo essay by-----

高橋 光夫

〒145-0061 東京都大田区石川町 1-26-8

(tel) 03-3727-8419 (fax) 03-3727-8505

(mail) mitsuo.takahashi@nifty.com
